

東京金剛会での講演を終えて

山田隆道

先日、東京金剛会の会合にて僭越ながら講演をさせていただきました。一九九五年三月に清風南海高校を卒業して以来、早いもので二十年以上の年月が流れましたが、まさか自分のようなOBに（決して模範的な学生ではありませんでした）そのような機会が巡ってくるとは夢にも思っていませんでした。

講演タイトルは熟慮の末『多様性時代の作家論』とさせていただきました。私は早稲田大学在学中にひよんな縁から放送作家としてデビューすることになったのを皮切りに、卒業後も就職することなく、現在に至るまでずっとフリーランスとして、バラエティ番組の構成台本やドラマ脚本、コント台本、舞台の作・演出、漫画原作、小説、エッセイなど、今思えば本当に節操なく、多様なジャンルの本を書き散らかしながら生きてきました。

これまでの著書を振り返ってみても、ジャンルや作風としての一貫性はあまり見出せません。「作家とは〜」といったポリシーのようなものもなく、なんとなく背中からやってきた多様な仕事を必死でこなしつつ、怪しさすら感じる物書き界隈の末端と隙間で長いこと拾い食いしてきたような職歴に、それなりのプライドを忍ばせていたりします。

近年では作家活動の一方で京都造形芸術大学の文芸表現学科で教鞭も執るようになり、ゼミおよび研究室を開設・運営しては、我が

ゼミ生に対して自らの怪しい「多様性」をあたかも文芸の正道かのように、あるいは芸術の主義かのように説いていたりもします。

まったく、昨今流行りの「多様性」という言葉は、なんとも都合のいいものです。皆様も薄々お気づきでしょうが、本来の作家道とは小説なら小説に専念する、脚本なら脚本に専念する、といった感じでひとつの道を究めるように健筆を振るえがいいのです。あのウサイン・ボルトは陸上の花形である一〇〇m走でこそ最大の真価を發揮し、その領域だけでも十分に輝けるわけですから、わざわざ陸上十種競技に挑む必要はないでしょう。

言わば、私はその逆なのです。ひとつの道では輝けないと無意識にわかっているからこそ、多様な競技にまんべんなく手を出し散らかして、小さな成果をまんべんなく積み散らかして、結果として「多様性」という耳馴染みのいい共通概念を生み出したわけです。

今年十月で四十三歳になります。二児の父です。ならばもう、しょうがないです。

【了】